慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『衆鱗手鑑残欠』の出現
Sub Title	Fragments of Shurin Tekagami （ an illustrated book of fishes ）
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 (The Hiyoshi review of the natural science). No.43 (2008.) ,p.75- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	創立150年記念号 : 実験科目の新しい試み = 156th anniversary number : new trials of student experiment classes
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20080331-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Hiyoshi Review of Natural Science
Keio University No. 43, 75–89（2008）

『衆鱗手鑑残欠』の出現

磯　野　直　秀

Fragments of *Shurin Tekagami*（An Illustrated Book of Fishes）

Naohide Isono

1　はじめに

博物誌の歴史を私が調べはじめてから30年近くなるが，その間に博物誌史に知られていない資料に偶然出会って，進む方向を大きく転じたことが２回ある。

第一は，1989年４月に三田の慶應義塾図書館で出会った『唐蘭船持渡鳥獣之図』。それまでは明治・大正時代をもっぱら対象にしていたのだが，この資料の調査をきっかけに江戸時代に足を踏み入れることになって，今日に至る（注１）。

第二は，2002年９月，上野の東京国立博物館で対面した狩野常信画『鳥写生図巻』。これ以降，画家のスケッチ集を調べはじめ，江戸時代初期についての新知見をいろいろ得ることができた（注２）。

「二度あることは三度ある」とは，昔からの成句。本来は悪い出来事についての言らしいが，私は良い意味で「三度目」にぶつかった。ただし，最初と二度目はそれまで知られていない資料との出会いだったが，三度目は書名は知られていながら寛政の頃から行方不明だった資料との奇遇であった。本稿はその報告である。

2　『衆鱗手鑑』との出会い

18世紀中頃の讃岐高松藩主松平頼恭（よりたか）（1711～71）は，同藩の産業振興を心掛けたこともあって生き物に関心が深く，動植物を画家に描かせて数々の美麗な図譜を作った大名だった。とくに評判になったのは魚類，イカやタコ，エビやカニ，クラゲなどを描いた魚介譜で，求められて第10代将軍徳川家治（いえはる）に，『衆鱗手鑑（てかがみ）』（乾・坤の折帖２冊，魚類399・海産無脊椎動物62，計461品，注３）という題をつけて献上した。宝暦12年（1762）１月29日のことである。

〒232-0066　横浜市南区六ツ川3-76-3-D210，慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210，3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066，Japan; Professor Emeritus，Keio Univ.) [Received Sept. 25, 2007]

『衆鱗手鑑』の献上後，頼恭はふたたび魚介図を描かせ，同時に増補もして図譜『衆鱗図』（折帖４冊，魚類490・海産無脊椎動物162，計652品）を作成する。この『衆鱗図』は松平家に現存し，現在は香川県歴史博物舘に寄託されている。かつて私はこの『衆鱗図』を調べて報告した（注４）。その後，2001～2005年に影印本も出版されている（注５）。

一方，家治に献上した『衆鱗手鑑』の原本は行方がわからなくなり，目録の写しだけが松平家に残っている（注６）。

2007年４月７日，東京大学三崎臨海実験所（三浦市三崎，注７）は創立120周年を迎え，記念シンポジウムが開かれた。私もそれに参加したが，その会場入口で休んでいるとき，何気なく脇の展示ケースに目をやった。すると，そこにＡ３判よりやや大きめのパネル３枚が，額縁に入れられて飾られているのに気付いた。いずれも１枚に数点の魚が描かれており，みな江戸時代の魚図だったが，いずれも左右の腹鰭２枚が＜のように並べて描かれている。私はこの形式を「腹鰭見開き式」と呼んでいるが，これは上記『衆鱗図』独特の特徴で，他にはほとんど例が無い。

『衆鱗図』の魚図は美しいので，江戸時代に多数の転写図が造られた。10数年前に『衆鱗図』原本を調査して以来，私はそのような転写図を載せた図譜をいくつも目にしている（注８）。したがって，展示ケースの図もその転写図の一つだろうと眺めているうちに，『衆鱗図』には無い魚図が含まれていることに気付いた。また，『衆鱗図』や，その転写本の魚名は平仮名か片仮名で記されている例が多いのに対して，この絵の魚名にはすべて漢字を用いている（漢名ではなく，和名の漢字表記）のも気になった。

これは詳しく検討する必要があると思ったが，その日は時間が無く，改めて翌週に実験所を訪れて調べてみると，予想をはるかに上まわる重要な資料であることが明らかになった。

３　『三崎本』の検討結果

数日後，三崎臨海実験所を再訪して調べた結果を，個条書きで示すと――

【パネルの構成】

（１）該当するパネルは他にも１枚あり，合計４枚存在することがわかった（図１）。以下，これをパネル１～４として示し，４枚をまとめて『三崎本』と仮称する。各パネルのサイズはほぼ同じで，所収されている魚類は計18品である（表１）。以下，パネルごとに品番号をつけ，パネル１－品３を「１－３」のようにして示す。

（２）パネルは厚手の紙製で，雲母（きら）引きされている（雲母（うんも）の微粉末を布海苔（ふのり）などと混ぜて刷毛（はけ）で塗る）。また，両端は幅７～９mmの紙で補強してある（パネル１・２は裏も同じ）。この特徴から，もとは折帖で，その台紙を１枚ずつ切り離したように思われる。

【魚図と付札について】

（３）魚図は一見パネルに「描かれている」ように見えるが，精査すると，全点とも別の画紙に描いた図を輪郭に沿って丁寧に切抜き，パネルに貼付している。これは『衆鱗図』と

図１『三崎本』のパネル２（上）と；パネル３（下）

◎図１・図３ともフラッシュの反射を避けるため，やや斜めから撮影した。なお，下図は中央の「無名」２匹［＝マアナゴの仔魚］が明瞭ではないが，図３・中左の「義左女」に写っているので参照されたい。

表１　資料の大要

パネル	右上の魚名	品数	パネルのサイズ *
1	鮒	7	縦33.3×横48.5cm
2	計太波寸	2	縦33.3×横48.7
3	女郎魚	6	縦33.3×横48.3
4	杉魚	3	縦33.3×横48.5
	魚図計	18	

* 現存の『衆鱗図』は各冊ともほぼ縦33×横48cm で，本資料のサイズに近い。

同じ手法である。図は表側だけにあり，裏面には無い。

（４）図はすべて彩色し，品名を記した付札を各図の傍に貼付している。残念ながら，絵具が変質して黒ずんだ図が少なくない。品名はみな和名だが，表２（86頁）で明らかなように，すべて漢字を用いて記載している。万葉仮名に濁点を振る場合もある。採集・写生年月日や，産地・特徴などを記した記文（解説文）は一つも無い。

（５）品名を記した付札は薄茶色無地で，縦3.7～3.9 × 横1.0cm である。なお，パネル１だけ，台紙の右上端に「河魚并湖魚部」と記した付札（8.1×1.8cm）が貼付されている。この付札は品名札とは異なり，金属光沢がある。『衆鱗手鑑目録』によると，『衆鱗手鑑』坤巻裏面の冒頭は「河魚并湖魚部」で，「鮒」から始まる。パネル１はその部分に該当する。

（６）１－７を除き（表２注記参照），２枚の腹鰭は「見開き式」で描かれている。前述のように，これは『衆鱗図』特有の表現法である。

【『三崎本』と『衆鱗手鑑』『衆鱗図』の比較】

（７）『三崎本』の魚名を『衆鱗手鑑目録』および『衆鱗図』と比較した。表２（86頁）がその一覧だが，明らかに『三崎本』の魚名表記は，濁点の有無など，わずかな例外（注９）を除いて『衆鱗手鑑目録』の魚名とほぼ一致し，現存『衆鱗図』が片仮名・平仮名を多用しているのとは異なる。

（８）表２の「所在」記載からわかるように，パネル１～４の魚図はそれぞれ『衆鱗手鑑目録』において隣接，あるいは近接して記されている品で構成されている。たとえば，パネル３の６点（３－１～３－６）は『衆鱗手鑑目録』ではＢ125～130に集まっているが，『衆

鱗図』では帖２ウ面の面11，12，43，44に分散している。また，パネル４の３点は『衆鱗手鑑目録』ではＣの36～38に対応しているが，『衆鱗図』では帖２ウ面の面７，10，49とバラバラに所収されている。このように，『三崎本』は『衆鱗手鑑目録』の記載とよく一致し，『衆鱗手鑑』の姿を伝えていると思われる。

（９）表２「３－４」のマアナゴ葉形仔魚の図は，『衆鱗図』には存在しない。

(10)『三崎本』の魚図と『衆鱗図』の魚図を比較してみると，多少なりとも鰭の形や斑紋の描き方などが異なる（表３，88頁）。違いがとりわけ目立つのは，鮒（１－１），赤松（１－２），苦鮒（１－３），赤魚（１－５），義左女（３－３），笛吹（４－３）などである（84頁，図３）。このように形態が異なる事例が大半を占め，ことに上に挙げた鮒～笛吹のように著しい違いがある以上，『三崎本』は現存『衆鱗図』をそっくり転写した資料ではない。

【検討のまとめ】

以上の検討から，『三崎本』は『衆鱗手鑑』の原本（献上本）の残欠，あるいはその転写本の残欠と結論できる。

『三崎本』が将軍家治に献上された原本に由来するか，その転写本かは今わからないが，別の画紙に描いた図を輪郭どおりに切り抜いて貼付するという丁寧な作り方（『衆鱗図』も同様な方法で作成されている）である点を考慮すると，原本の一部である可能性は少なくないと思う。しかし，原本と断定するには，より詳細な検討が必要であろう。

ともあれ，確実に『衆鱗手鑑』に由来する魚図の発見はこれが初めてである（注10）。『衆鱗手鑑』は行方不明とされてきたので，『三崎本』はわずか18点の残欠にすぎないが，日本博物誌史にとって注目に値する資料といえよう。これを『衆鱗手鑑残欠・三崎本』と名付けておきたい（注11）。

４　『衆鱗図』の作成

『衆鱗手鑑』の献上後，松平頼恭侯は改めて魚介譜を作らせた。それが現存する『衆鱗図』だが，『衆鱗手鑑』と『衆鱗図』の関係は従来はっきりしなかった。可能性としては――①松平侯の手元にスケッチの原図集または控図があり，『衆鱗手鑑』『衆鱗図』とも，それを転写したものである，②『衆鱗図』を転写して『衆鱗手鑑』を作成・献上した，③逆に，献上に先立ち，『衆鱗手鑑』を転写して『衆鱗図』を作成した，④『衆鱗手鑑』の献上後に，原図あるいは控図があるものはそれを転写させ，一部は新たに魚をスケッチさせて『衆鱗図』を作成した，⑤新たに魚介類を採集して写生させた，の５通りが考えられる。

そのうち①～③の場合は『衆鱗手鑑』と『衆鱗図』の魚図はどれも酷似すると思われるが，実際には表３に示したようにかなりの相違が見られる。

逆に⑤ならば，『衆鱗手鑑』と『衆鱗図』の図は大半が著しく異なると思われるが，表３でわかるように，実際にはかなり似ている図が少なくない。

このように見てくれば，①～③や⑤ではなく，④の可能性が大きい（注12）。

5　行方不明になった『衆鱗手鑑』

第２節冒頭に記したように，宝暦12年（1762）１月，『衆鱗手鑑』は讃岐高松藩主松平頼恭から10代将軍徳川家治に献上された。その後，注10に記したように抄写本が作られ，それを民間の医師後藤梨春が自著『随観写真』中に，幕医栗本丹洲（1756～1834）が自己の魚介譜中に転写したと思われる。梨春は明和８年（1771）に没したので，抄写本の作成はそれ以前のことである。

しかし，『衆鱗手鑑』自体は江戸城から忽然と消えてしまう。

寛政11年（1799）４月４日，小野蘭山は若年寄堀田正敦（まさあつ）宅に呼ばれ，「海錯写真折本（割注，讃侯物）二冊被出（だされ），一々有（あり）漢名之御尋」があったと，その日記に記している（注13）。海錯は海産動物，讃侯は讃岐高松藩主のことだから，私は『日本博物誌年表』（注14）で，献上品の『衆鱗手鑑』を見せられたのだろうと推定したが，この推定は誤っていた。もし。この時点で『衆鱗手鑑』が江戸城にあれば，幕府の高級医師で，正敦とも親しかった栗本丹洲が借り出し，全図を写して手元に置いていたに違いない。ところが，そのような形跡が見られないので，すでに『衆鱗手鑑』は失われていたと思われる。

一方，丹洲は『衆鱗図』の帖３・４の２冊の全図を精密に転写しており，正敦は自著『観文介譜』のカニの部分で，12回も『衆鱗図』帖３を引用している。正敦は高松藩から『衆鱗図』を借用し，丹洲にも転写させたことがあったのである。となると，蘭山が見せられた２冊はこの『衆鱗図』帖３・４だったのではないか。

話を元に戻すと，結局『衆鱗手鑑』は宝暦12年（1762）の献上後，さほど時を経ないうちに行方不明になっていたとわかる。

幕府が集めた史書・古辞書・漢籍・洋書などは，延焼の危険性の少ない「紅葉山（もみじ）文庫」に収納されていたが，重要度の低い図譜などの類は同文庫には入れられず，西ノ丸などに置かれていたのではないかと思われる。その西ノ丸は何度も火災に遭っているので，『衆鱗手鑑』はその折に焼失したのかと思いこんでいた。

ところが，僅かな残欠にせよ，三崎臨海実験所に『衆鱗手鑑』の一部が現れたのである。

6　『衆鱗手鑑残欠』の出現

ではその『三崎本』はどういう経緯を経て，臨海実験所に現れたのか。元所長（1972～75）の小林英司東大名誉教授などの話をもとに，その跡をたどると次のような次第だった。

①入手したのは，米国コロンビア大学の教授で，魚類を研究していたバシュフォード・ディーン（Bashford Dean，1867～1928：注15）。彼は明治33～34年（1900～01）と38年（1905）に，三崎臨海実験所に長期間滞在して魚類を研究したが，『衆鱗手鑑残欠』を入手したのは最初の来日時の可能性が高い。コロンビア大学の日本関係蔵書目録（注16）の該当する項に，「1900～1901」と記されているからである。しかし，詳細は不明で，入手時にどのような書

名だったか，何処から入手したのか，すでにパネルになっていたのか，あるいは折帖の形だったか，何枚あるいは何冊だったか，などは皆目わからない。

②ディーンは，この魚図資料をコロンビア大学動物学教室に寄贈した。寄贈の時期はわからないが，受け入れの折に混乱があったか，当資料は明治期の三崎臨海実験所にいた研究者の西川藤吉（注17）が描いた魚図とされてしまった。そして何時の頃からか，同教室ではパネルを額縁に入れて，部屋や廊下に飾っていた。

③小林教授は一時コロンビア大学の動物学教室で研究されていたので，額入りの魚図の存在を知っておられ，それを，ディーンを介して同大学と三崎臨海実験所が結ばれていることの記念にしたいと考えられた。そして1979年に同教室を再訪したとき，その内の何枚かを三崎臨海実験所に寄贈してもらえないかと頼んだ。幸い，その希望が叶えられて，パネル４枚が実験所に寄贈された。それが，本報で扱った『衆鱗手鑑残欠・三崎本』である（注18）。

④コロンビア大学動物学教室に残ったパネルは，その後，同教室から同大学の美術保管部（Art Properties）に移管された。移管後の記録では，名称は『魚類図集』，パネルは計28枚（額10枚），図数は合計104（注19）。この資料を，いま仮に『衆鱗手鑑残欠・コロンビア本』と呼ぶことにする。

＊　＊　＊

『衆鱗手鑑』・『衆鱗図』・その転写図譜の類の３者の関係は込み入っているので，次頁の図２に示しておく。

7　今後の課題

『衆鱗手鑑残欠』については，今後検討すべき点が二つある。

第一は，それが原本（献上本）の残欠なのか，精巧な転写本に由来するのかの判定である。それには，品名の筆跡が決め手になる可能性がある。松平頼恭侯の事跡をまとめた『増補穆（ぼく）公遺事』（注20）に，「[『衆鱗手鑑』献上の際に］名札御改め悉く御自筆にて被遊（あそばされ）候」と記すのが正しいとすれば，『三崎本』の付札の筆跡は頼恭侯のそれの筈だからである。もっとも，まだ詳細に調べたとは言えないが，『三崎本』の付札の筆跡は『衆鱗図』の付札の筆跡とよく似た点があり，ともに同一の右筆の記したものかもしれない。もちろん，その場合も献上本と結論できるわけである。いずれにしても，高松藩史に詳しい専門家の検討を要する。

第二は，『三崎本』では魚図がパネルの片面にしかない点。『衆鱗手鑑目録』によると，乾・坤の２冊とも表側・裏側の両面に図があった。折帖の台紙を切り離したのち，それをさらに表側の面と裏側の面に分離して，２枚に分けたのだろうか。技術的には可能と思うが，これも，その方面に詳しい専門家に委ねなければならない。

なお，『衆鱗手鑑残欠・コロンビア本』（仮称）については，コロンビア大学の方々に現状を調べていただいているので，遠からず詳細が判明すると思う。➡追記（85頁）

『衆鱗手鑑』が何時，どのような事情で江戸城から消えたのか，そして残欠がディーンの手に渡るまでの経緯も知りたいところだが，これは無理な話かもしれない。

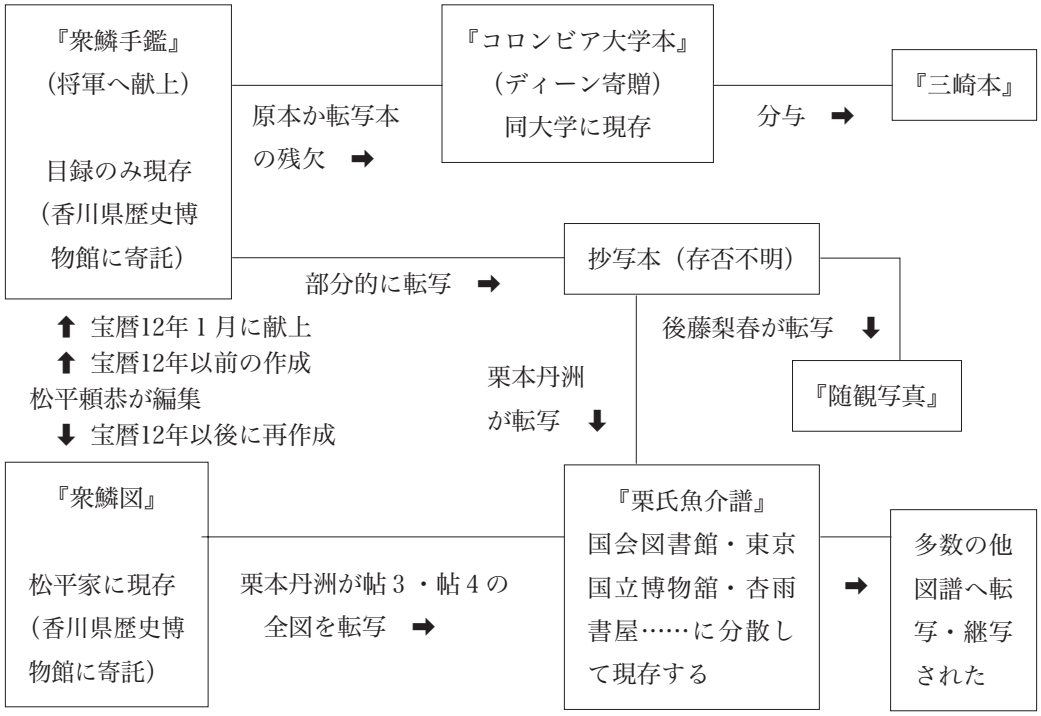

図２　『衆鱗図』系統の魚介図（注４文献，本稿第５節参照）

注記

（１）『舶来鳥獣図誌』（磯野直秀・内田康夫編，八坂書房，1992年）の「あとがき」に詳しく記したように，1989年４月の経済学部・学部会議に出席するため日吉から三田に行ったとき，会議まで多少時間があったので，図書館に入り，右手の展示ケースを何気なく覗いたところ，ゾウやインコの素晴らしい彩色画が目に飛び込んできた。それが『唐蘭船持渡鳥獣之図』との初顔合わせだった。これはオランダ船・清船が長崎に持ち込んだ鳥獣を描いた図譜で，従来いわれていた以上に多くの種類が渡来していたことを明らかにできた。

（２）これも，「博物誌資料としての『鳥写生図巻』」（磯野直秀，MUSEUM，584号，2003年）の前書きに述べたが，東京国立博物館のある展示を見ようと出かけて，その手前の展示場で広げられていた写生図巻に気付き，それに小笠原諸島固有種のメグロなどの珍鳥や，海外産のインコなどが描かれているのに驚いた。それが，狩野常信画『鳥写生図巻』で，当時同館の客員研究員だった私は，早速その図巻を調べ，ついで同じ常信のスケッチ集『草花魚貝虫類写生図』（同館蔵），さらに狩野重賢画『草木写生』（国会図書館蔵）などにも手を伸ばした。上記３点とも，それまで博物誌の視点から検討されておらず，江戸時代の初期の渡来草木などについて，数々の新知見を得ることができた。➡磯野直秀，

博物誌資料としての『草花魚貝虫類写生図』，MUSEUM，590号，2004年／磯野直秀，狩野重賢画『草木写生』，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，36号，2004年。

（3）「折帖」は「屏風」や仏教の「経」のように，折りたたみ式の書物や図譜。表側だけを使う場合と，裏側も利用する場合がある。

（4）磯野直秀，『衆鱗図』と栗本丹洲の魚介図，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，15号，1994年。ただし，本稿に記した品数などは注5に記した磯野報文による。

（5）『衆鱗図』影印本（カラー撮影本）4冊＋研究編（動物名の同定など）1冊，香川県歴史博物舘編，2001～05年：磯野直秀，『衆鱗図』について［概説］，同上第5冊・研究編に所収。

（6）『衆鱗手鑑目録』は，注5に記した『衆鱗図』影印本の第4冊に所収されている。それによると，同書は，海産魚338，淡水魚61，カニ17，エビ22，イカ・タコ7，クラゲ2，その他14，計461品を所収。

（7）現在の正式名称は「東京大学大学院理学系研究科附属臨海実験所」だが，本稿では通称の「三崎臨海実験所」を用いる。

（8）注4文献，46～53頁。

（9）表2で，2－2および3－3の魚名における濁点の有無，3－4の「二種」の有無だけが異なるが，いずれも本質的な差異ではない。

(10)『衆鱗手鑑』の転写と推定される図は，すでに見付かっている。論証の過程がややこしいので，詳しくは前報（➡注4文献，48～51頁）に譲るが，栗本丹洲の魚介譜には『衆鱗図』とやや異なる点のある魚類転写図がかなり存在する。それが『衆鱗手鑑』由来の図と考えて調べた結果，献上本『衆鱗手鑑』の魚図（399品）から誰かが200図ほどを転写して抄写本を作成したと推測するにいたった。丹洲の魚介譜には，この『衆鱗手鑑』抄写本からの再転写図と，『衆鱗図』帖3・4からの転写図（全点を写している）の双方が含まれる。一方，後藤梨春の『随観写真』にも『衆鱗図』系の転写図（腹鰭見開き式）が数多く含まれるが，こちらは上記抄写本からの再転写図ばかりと思われる。

(11) 後述のように，アメリカのコロンビア大学にも『衆鱗手鑑』の残欠が存在する。それを『衆鱗手鑑残欠・コロンビア本』と呼び分けておく。➡追記（85頁）

(12)『衆鱗図』影印本・研究編に記した概説（➡注5）において，「多数の図を短期間に描き直すのは無理と思われるので，献上の話が出た時点で手元にあった図を『衆鱗手鑑』と名付けて差し出し，その分を<u>控図から再度描き，新たな図も加えた</u>のが，現『衆鱗図』ではないか」（概説，p.xの末尾から6行目以降）と記した。つまり，控図からの転写が多いだろうと思っていた。しかし，本資料の図は『衆鱗図』中の図と予想以上に異なっており，少なくとも第3節（10）で挙げた「鮒～笛吹」などの例については，控図の転写とはとても思えず，別個体を写生したと考えるのが妥当だろう。したがって，上記引用文の下線部分は「控図を転写したり，同種の個体を新たに写生したりした上，『衆鱗手鑑』に無い品も加えた」と改めたい。

図 3　『三崎本』（左）と『衆鱗図』（右）の魚図の比較
上左，赤魚（三崎本１－５）：上右，赤魚（衆鱗図・帖３ウ６－３）
中左，義左女（三崎本３－３）：中右，きざめ（衆鱗図・帖２ウ44－１）
下左，笛吹（三崎本４－３）：下右，ふゑふき（衆鱗図・帖２ウ49－１）
◎いずれも，表３を参照のこと。中左の図には，「義左女」のほかに，「無名」２匹（マアナゴ仔魚➡表２）も写っている。下側の仔魚は変態期にあたる。

(13)『蘭山日記』，同日条。小野蘭山は京都の人だが，この年の春，幕府の命で江戸に出，幕府医学館で講義することになった。幕府文教政策の最高責任者だった若年寄堀田正敦の意向によるといわれる。

(14) 磯野直秀，『日本博物誌年表』，平凡社，2002年。

(15) 磯野直秀，『三崎臨海実験所を去来した人たち：日本における動物学の誕生』，学会出版センター，1988年。

(16) “Japanese Woodblock Printed Books and Other Unique Japanese Materials at Columbia University, compiled by MIWA Kai, 1996”, 776-777：コロンビア大学Ｃ・Ｖ・スター東亜図書館員・野口幸生（さちえ）氏の御好意による。該当項は下文のとおり。
「2664　Gyorui zushū／魚類図集　28枚・10額／ Nishikawa Tōkichi 西川藤吉／東京 明治33-34（1900-01）／ col. illus. in 10 frames.／Illustrations of 104 specimens of fish, each cut out and mounted on mica coated paper and identified by Japanese names handwritten with a brush and mounted. Watercolor.」（以下略）➡追記（85頁）

(17) 西川藤吉は，東大動物学教室を明治30年（1897）に卒業。三崎臨海実験所では真円真珠の養殖を研究し，最初に成功したといわれる。また，実験所ではディーンの研究も助けたらしい。➡注15文献

(18) 小林教授は，その魚図を誰が描いたかを知りたいと前々から望まれていた。だが，江戸時代に踏み込んで，実験所から遠去かっていた私は，魚図が三崎臨海実験所に寄贈されたことも，小林教授の長年の望みも知らなかった。そして，最初に記したように，2007年の春，偶然その魚図に出会ったのだった。

(19) 注16文献による。

(20) 後藤芝山著・滝 信彦増補，『増補穆公遺事』，『新編香川叢書・史料編１』（香川県教育委員会編），29-93，1979年。

謝辞

本研究に際して，小林英司東京大学名誉教授から魚図寄贈の経緯をお教えいただいたほか，東京大学三崎臨海実験所長の赤坂甲治氏，国立国会図書館古典籍課の間島由美子氏，コロンビア大学Ｃ・Ｖスター東亜図書館の野口幸生氏，東京大学総合研究博物館の坂本一男氏にお世話になりました。この場を借りて，皆様に御礼を申しあげます。また，東京大学大学院理学系研究科附属臨海実験所（三崎臨海実験所）には『衆鱗手鑑残欠』の撮影を，香川県歴史博物館には『衆鱗図』影印本中の魚図の使用を許可していただいたことを感謝いたします。

追記：野口氏に提供していただいた写真によると，コロンビア大学には，2007年末の時点で少なくとも18パネル66品（魚類52品、クラゲやナマコなど14品）が残っている。

表２　『三崎本』の構成と，『衆鱗手鑑目録』『衆鱗図』記載魚名との比較

凡例　１　（　　）内にその品の所在を示す。オ，表側の面；ウ，裏側の面。
２　『衆鱗手鑑目録』　Ａ＝乾巻オ；Ｂ＝乾巻ウ；Ｃ＝坤巻オ；Ｄ＝坤巻ウ。たとえば，（Ａ５）は「乾巻オ面－品番号５」。
３　『衆鱗図』　①＝第１帖；②＝第２帖；③＝第３帖；④＝第４帖。
たとえば，（②オ３－１）は「第２帖オ面－面番号３－品番号１」。面番号・品番号はともに『衆鱗図』影印本で使用している番号に従った。
４　下線部は割注または角書，振仮名はそれぞれの原本どおり。
５　現和名は『衆鱗図』影印本・研究編による（表２末尾の注記参照）。

番号	『三崎本』記載名	『衆鱗手鑑目録』記載名（所在）	『衆鱗図』記載名（所在）	『衆鱗図』所収品の現和名
１－１	鮒（フナ） 漢名鯽	鮒（フナ） 漢名鯽 （Ｄ１）	鮒 （③ウ３－１）	ギンブナ
１－２	赤松	赤松（アカ） （Ｄ２）	赤松 カカラ （③ウ26－１）	オイカワ
１－３	苦鮒（ニガ）	苦鮒（ニガ） （Ｄ３）	ニガ鮒 （③ウ３－３）	ヤリタナゴ
１－４	白鰷（ハエ）	白鰷（ハエ） （Ｄ７）	白ハヱ （③ウ11－１）	ハス幼魚
１－５	赤魚	赤魚 （D10）	赤魚 （③ウ６－３）	ウグイ
１－６	塩吹鮒（シホフキ）	塩吹鮒（シホフキ） （Ｄ４）	シヲ吹鮒 （③ウ３－２）	ギンブナ 狆頭個体
１－７	本子（ホンノコ）	本子（ホンノコ） （D11）	ボンノコ（図欠） （③ウ14－１）	ハゼ科の一種

2－1	計太波寸	計太波寸 （C24）	ケタハス （③ウ14－2）	ハス♂
2－2	目佐ゞ之	目佐之 （C25）	めさし （②ウ48－1）	メダイ幼魚
3－1	女郎魚 讃州方言 邊ゞ呂古	女郎魚 讃州方言 邊ゞ呂古（B125）	べろこ （②ウ43－2）	キュウセン♀
3－2	別種 女郎魚	別種 女郎魚 （B126）	あをべろこ （②ウ43－1）	キュウセン♂
3－3	義左女	義左ゞ女 （B130）	きざめ （②ウ44－1）	ホシササノハベラ♂
3－4	無名 讃州産 ［2匹］	無名 二種讃州産 （B129）	該当項目ナシ	マアナゴの葉形仔魚 ［2匹とも］
3－5	江曽ノ於波ゞ讃州方言	江曽ノ於波ゞ讃州方言（B128）	ゑそのおば （②ウ12－1）	オキエソ
3－6	江曽	江曽 （B127）	ゑそ （②ウ11－1）	マエソ
4－1	杉（スギ）魚 又加持幾 又奈々子魚	杉（スギ）魚 又加持幾 又奈々子魚（C36）	すぎうを （②ウ7－2）	シマイサキ
4－2	飛（トビ）魚 漢名文鰩魚	飛（トビ）魚 漢名文鰩魚 （C37）	とびうを （②ウ10－1）	トビウオ
4－3	笛吹	笛吹 （C38）	ふゑふき （②ウ49－1）	ハマフエフキ幼魚

（注記）1－7と3－4の同定は坂本一男氏による。また，ハゼは腹鰭が癒着して吸盤となっているので，1－7の腹鰭は1枚だけ描いたのだろうとの示唆を同氏から受けた。

表３　『三崎本』と『衆鱗図』の魚図の異同（注Ａ➡本表末尾）

番号	魚名（三崎本）	『三崎本』	『衆鱗図』
１－１	鮒	背鰭前部が盛り上がる 尾鰭に黒点ナシ	背鰭に盛り上がりナシ 尾鰭に小黒点あり
１－２	赤松	背鰭・尻鰭，ともに小	背鰭・尻鰭，ともに大，先が尖る
１－３	苦鮒	背鰭は尾近くまで延びて，第１棘が分離 尻鰭は三角形	背鰭は背の中央部にあり，第１棘は分離しない 尻鰭は台形
１－４	白鰷	顎下に３本の棘	顎下に棘ナシ
１－５	赤魚	背鰭，台形 尻鰭，小。尾鰭，深く湾入	背鰭，正三角形 尻鰭，大。尾鰭，浅く湾入
１－６	塩吹鮒	背鰭第１棘・第２棘が分離	背鰭第１棘・第２棘は分離しない
１－７	本子		項目はあるが，図欠
２－１	計太波寸	胸鰭・腹鰭，丸みがある	胸鰭・腹鰭，ともに鉤爪状
２－２	目佐之	尾鰭の前に黒色帯ナシ	尾鰭の前に黒色帯あり
３－１	女郎魚	背鰭・尻鰭に赤色帯ナシ 胸鰭，先端が尖る	背鰭・尻鰭に赤色帯あり 胸鰭，先端に丸みあり
３－２	別種女郎魚	体の黒斑がほぼ隠れている	体の黒斑の上半が見える

3－3	義左女	背の白斑は2列 背鰭に軟条部ナシ 尻鰭，19条，棘が鋭く突出	背の白斑は3列 背鰭の軟条部が明瞭 尻鰭，35条，棘は突出せず
3－4	無名		該当品ナシ
3－5	江曽ノ於波	第1背鰭下に黒帯ナシ 第2背鰭下に黒帯あり	第1背鰭下に黒帯あり 第2背鰭下に黒帯ナシ
3－6	江曽（注B）	第1背鰭，背の中央部 第2背鰭，尻鰭の真上 尻鰭は平たい 腹鰭，2枚	第1背鰭，背のやや前部 第2背鰭，尻鰭末端の上 尻鰭は三角形 腹鰭，1枚だけ描く
4－1	杉魚	尾部の黒色帯が不明瞭 背鰭軟条部・尻鰭・尾鰭に赤色帯がある	尾部の黒色帯が明瞭 背鰭軟条部・尻鰭・尾鰭に赤色帯が無い
4－2	飛魚	胸鰭・尻鰭の棘が長く突出	胸鰭・尻鰭の棘突出が短い
4－3	笛吹	体に青色帯が無く，青色点の縦列がある	体に青色帯があるが，青点の縦列はナシ

（注A）変色の可能性があるので，色の相違は取り上げなかった。

（注B）『衆鱗図』には「ゑそ」が3点（②ウ11－1，②ウ11－2，②ウ12－2）含まれるが，そのうち『三崎本』の「江曽」に体型がもっとも似ている②ウ11－1と比較した（記号については，表2凡例参照）。